

# 「終戦の詔勅」録音盤事件の一部

原 久雄

弥生町六丁目

昭和二〇年八月十四日の蒸し暑い夕暮れが近づいてきた。毎日、アメリカ軍のB29による東京空襲に明け暮れていたのに、この日には空襲警報がなかった。何だか静かすぎて変だなあと思いつながら、日暮れ前に夕食を終えた。

私は、近衛師団戦時体制のため、近衛歩兵第四連隊が編成されたので、九段の近衛歩兵第二連隊より転属になった。麻布の龍土町にある麻布三連隊を佐倉に移動させ、そのあとの兵舎に入った（現在の東大生産技術研究所である）。

兵舎は、鉄筋三階のエレベーターが備えられたモダンな建物である。空襲の目標になるといので、ソ連大使館が見える崖下の、空襲で焼けた住宅地のあとに退避壕をつくり、そこで任務のない時間を過ごしていた。

空襲で家屋が焼かれるので、延焼を防ぐ空間地帯をつくるために、強制撤去された木造住宅の廃材を使って、半地下式の退避壕をつくったのである。

食事は、当番が龍土町の兵舎から食缶で運んで来て、終えた

ら食器とともに兵舎に持って行って返す生活であった。

夜となり、外の明かりは消え、空の星がキラキラと輝きを増して見えてきた。そろそろ寝ようかなあと言っていると、「命令受領にあつまれ」の合図があった。

退避壕から一人ずつ中隊本部の壕に出ていった。しばらくして、命令を持って来た。

「今夜、第一装を着用し、宮城（皇居）守衛に準じて集合。時刻は追って知らせるが、直ちに準備にかかれ」というのである。

一人の持ち物は、軍服が一装、二装、三装の三着で、一装は宮城（皇居）守衛用、二装は外出用、三装が普段着であり、演習用である。靴は二足で、守衛と外出用、悪い方が演習用である。帽子は軍帽と戦闘帽と鉄帽である。襦袢（シヤツ）、跨下（ズボンシタ）も三組支給されている。いつも清潔にしておくことを厳しく言われている。

命令で、一装着用というので、皆命がけで何かをやるのだと

覚悟したようであった。その証拠に、身の廻りの整理をしている。

また、「死んだあと笑われないように、きちんとしておかなければなあ」と古参兵が誰にといいことなしに言っている。

初年兵が「一錢玉は置いていこう」と言えば、他の者も同調して、誰かが出した空き箱に一錢玉だけ何個も集まった。

「何処に行くのだろう?」「アメリカ軍が九十九里浜に上陸するらしいから、今から戦いに行くらしい」「重臣を襲うらしい」と等と、勝手なことばかり言っている。おしゃべりをしながら着替えを整え、軍装を整え、タバコに火をつける。ローソクの火に照らされて吸う「ほまれ」の味は、いろいろなことを思い出させる。

夜も大分遅くなって、集合の合図があった。夜の行動であるから、声は出してはいけないし、物音をさせないように気を付けて行動する。

人員点呼、本部へ報告、しばらくして中隊長の後について歩き始める。坂道を登って、六本木の交差点に出る。右も左も前も後ろも焼け野が原になっているのが、暗闇の中にも感じられる。

都電のレール沿いに、坂を下り始める。靴音だけが響く舗装道路を黙々と歩く。どっちの方向へ歩いているか、はっきりわからない。しばらく歩いていって、日比谷公園の方へ歩いてい

ることがわかった。

号令は一切ないので、前の人の動きにつれて自分も行動しなければならぬ。前の方から止まっている。腰をおろして休めという合図である。時間は午前〇時頃であろうか?。背囊を背負ったまま、銃を肩に道路の端に腰をおろして休む。後の建物を見ると警視庁である。桜田門の近くであることを知る。

どれくらい時間がたったのか、退屈だなあと思っていると、出発の合図で前の方から並び始めた。列を整え、歩き始めるのを待つ。前から動き始めたので、ついて歩くかっこうで進む。明かり一つないから、空の薄明かりでいろいろ見当つけるほかない。

警視庁の前の交差点を真っすぐ歩いて、桜田門に入っていく。宮城（皇居）にきたのかと思いつながら、前について歩く。祝田橋近くまで来た時、先頭から止まって休憩の隊形をとっている。中隊全部が一か所にまとまり、次の命令を待つことになった。

私は中隊長に呼ばれ命令を受けた。「兵二名を連れて、祝田橋に立哨し、何びとも通行させるな」ということだ。命令は以上であるが、「特に気をつけることは、近衛師団の将校であっても絶対に通してはならない。丁寧にお断りせよ」という。私は命令を復唱し、兵二名を連れて祝田橋の真ん中に来た。銃には五発の実弾を込めさせ、日比谷公園の方向と桜田門の方向を見張らせ、人が近づいたら私が確かめ応対することにした。

何のために、どうしてここから誰も通してはならないのかわからないが、命令のままに立哨した。右に左に祝田橋の上を歩き回りながら人が近づかないか警戒し、静かな夜が過ぎていくが、時計を見ても何も見えない。

夏の夜は早く明ける。東の空が段々と明るくなり始める。すっかり明るくなり、午前五時頃、三宅坂の方から会社員らしい男性が、戦闘帽をかぶり、背中には鉄帽を背負い、急ぎ足で近づいて来た。桜田門で入れられず、ここで又入ろうとした。

「二重橋まで遙拝に行きたいのですが」と言う。「今朝は、ここから中には入れませんが」と言う。「ではここから遙拝させていただきます」と言つて、道の真ん中に正座をして深く深く遙拝し、立ち上がった後、「どうもありがとうございます」と言つて日比谷交差点の方へ歩いて行つた。

太陽も昇り、人の姿が目につくようになったが、祝田橋に向かつてくる人はいない。

午前八時頃になって、中隊長の命令で「直ちに撤収し中隊まで引き揚げよ」の伝令が来た。

私は兵二名と中隊全員の休憩地に戻り、銃の実弾を集めて担当者に戻し、「苦勞さん」と言つて歩哨の任を解いた。前夜来一睡もしていないが、疲れた感じもしない。

今度は大きな声で、装具を身につけて集合の号令がかかった。中隊長より、「今度の行動は、近衛師団長の命令として受けとめ

た。しかし、近衛師団長は暗殺されていたことが分かった。我々は中隊に帰り、正午のラジオ放送を聴くようにせよ」との話があった。

近衛歩兵第三連隊と近衛歩兵第四連隊が、宮城（皇居）のすべての門を閉鎖し、近衛歩兵第一連隊と近衛歩兵第二連隊の任務のない者が宮城の中にはいつて「終戦の詔勅」の録音盤を捜し出し、放送させない計画だったことを中隊長から聞かされたのは、その日の夕方であった。

戦争には負けたけれども、戦争が終わり、この日から部屋の電燈が明るく点灯できるようになり、いろいろと複雑な気持ちになったのは、私一人ではなかったと思う。この日、私は二四歳であった。